

JSI Newsletter

日本免疫学会会長就任に当たって

日本免疫学会会長 笹月 健彦

輝かしい栄光と伝統を誇る日本免疫学会の第13代会長(1995~1996)を仰せつかり、たいへん光榮に存じます。初代・山村雄一会長以来、その複雑多様な生命現象に魅せられ、免疫現象の本質の理解と医学への応用を夢みて学問専一に走ってきた日本の免疫学会の良き伝統を継承し、しかも激しく進展する時代の要請を先取りした改革と、新しい方向づけをも模索したいと考えております。若い学問、新しい学会といわれてきた免疫学会も設立以来四半世紀を経るに至り、いまや免疫学は成熟し、分子細胞生物学の中心となりました。学会もこの25年の間に、国際免疫学会を主催し、日本人免疫学者・利根川進博士のノーベル医学生理学受賞をはじめ、日本免疫学会会員からの世界へ向けての情報の発信は、その質と量において世界のトップレベルに躍りでる結果となりました。幸い、文部省科学研究費の特別推進研究、重点領域研究などの分野でも免疫学研究が認められ、期待をもって支援される状況となりました。免疫系の多様性と多型性の分子的基盤、自己寛容獲得の分子機構、さらには外来抗原に対する免疫応答の制御の分子機構などが、分子細胞生物学や発生工学の知識と技術を動員してその詳細がつつぎつつに明らかにされつつあり、免疫学はその歴史の中で、いま一つのピークを迎えようとしています。本来、臨床医学から出発した免疫学が、これら免疫機構の分子的理解に立脚して、もう一度臨床医学へ回帰し、現代医学が解決を迫られている先天性免疫不全やエイズ、アレルギー、自己免疫疾患、感染後の重篤疾患、移植に際しての拒絶反応など、免疫応答できないための疾病や、

免疫応答したための疾病に対し、根源的治療法を模索できる時代を迎えました。

前途有為な、ambitiousな若者が多数この近代分子免疫学に挑戦し、医学の難問の解決に貢献して欲しいと思います。そのためには、研究を始めたばかりの大学院生や若い研究者たちに対する、免疫学の各分野の第一線の研究者によるintensive courseを学会が経済的に支援すること、世界中に留学し活躍している若い学会員が、日本の年次学術集会を機会に一堂に会し、相互刺激を行うことなど工夫をこらす必要があると思われます。またわが国の医学部・医科大学をはじめ、理系の学生たちがどのような免疫学の教育を受けているのか、どのような講義と実習がなされているのか、その実態を学会として把握する必要があります。

現在わが国には、国立のがんセンター、循環器病センター、精神神経センターなどが設置され、それぞれ研究、診療の第一線を担っています。免疫学に関わるこのようなセンターを構想することは、研究対象の重要性と学問の進展度、すでに述べた免疫に関わる疾病の多様性と重症度と頻度とに鑑みて、たいへん重要で時宜を得たことだと思えます。このように考えてきますと、25年という時を経て成長した免疫学会が、いま為すべきことは少なくありません。国際的には次期IUIS多田富雄会長を支援し、IUISを通じて世界に貢献すべきであると思えます。

次の25年の間には、大きく花開いた免疫学が、臨床医学の分野で実を結ぶことは疑いありません。また、もう一度国際免疫学会を主催することになるでしょうし、ノーベル賞に相当する仕事を実を結ぶことも疑いありません。

そのためには、それぞれの世代の免疫学者が独創性を重んじながら未解決の難問に挑戦し、しかも協力しあいながら、深みのある成熟した学会を造り上げることが必要です。日本免疫学会全会員の一層の健闘を期待致します。